

## 年間第12主日の説教

金 大烈 神父 2009年6月21日(日)

### 《イエス様は必ず私を守って下さる》

おはようございます。

政治的なことで犯罪人になって政治犯として35年間刑務所にいた人が書いた本を今読んでいます。一緒に刑務所で刑に服していた人の中に大工さんがいたそうです。その大工さんのことで気がついたことが書かれています。皆さんは子供たちに「お父さん、お母さん、家の絵を描いて」とせがまれて、白い紙に家の絵を描く時どこから描きますか？普通は屋根から描きますよね。次に柱・・・というように上の部分から下の部分へと描きますね。しかしその大工さんはまず礎、次に柱、梁、横桁、垂木、最後に屋根を描いたそうです。屋根から描くのが常識だ、当たり前だと思っていたが、家の専門家は違う描き方をした。その姿を見てものすごくびっくりしたそうです。そして今自分が当然だと思っていることでも間違っていることがあるんじゃないかと気づかされたそうです。私も自分がまちがえていることがあるかもしれないと反省しました。そして感動して読みました。

さあ、今日の福音(マルコ 4・35-41)の物語の中に入ります。皆様、私たちはイエス様の弟子たちの一人だと思いながら、この話の中に入ってみましょう。ガリラヤ湖畔でイエス様は群衆にいろいろな話をしました。夕方になって弟子たちに「向こう岸に渡りたい。舟を出して欲しい」と言われました。イエス様は舟に乗るとすぐ枕をして眠ってしまいました。弟子たちは漁師です。ですから私たちもいま漁師ですよ。漁師というものは湖のこと、水や風の流れ、天気についてとても詳しいです。今まで漁をしてきた経験からなんらかの感覚があります。それで今日の天候なら舟を出しても大丈夫だろうと舟を漕ぎ出したのです。ところが激しい突風が起きました。突風とは何ですか？いきなり強く吹く風ですよ。予想がつかない激しい風のことでしょう。湖の波、風に詳しい漁師たちにも予想できなかった激しい波が舟におそいかかり、弟子たちは緊迫しました。どれ位緊迫した状態か考えればわかります。その時に湖や風について自信のあった人々が感じた気持ちは何でしょうか？"怖さ"でしょう。怖かったでしょう。なぜ怖かったか。このまま死んでしまうのではないかと。皆様も同じ気持ちになったでしょう。多分私もその舟に乗っていたら同じ気持ちになったと思います。イエス様はぜんぜんかまわず寝ています。それを見た私たちは腹が立って「こんな時にあなたは寝ているのか。何とかして下さい。」と叫びたい気持ちになります。弟子たちに起こされたイエス様が立ち上がって、湖に「黙れ。静まれ」と言われるとすぐ凧になりました。そして、イエス様は「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」と言われました。弟子たちはこの世の中で一番イエス様のそばにいて、その御心や振る舞いを経験した人々です。それにもかかわらずいつも疑いばかりでした。結局、聖霊降臨によって聖霊が下ってから完璧にイエス様の御心を理解することができたのです。

私たちは信仰面で屋根から描くことを選ぶとされているところがあるのではないのでしょうか。よく考えてみて下さい。この12人の弟子、一人は裏切り者になったので11人の弟子たちは、このようなひとつひとつの段階を踏み自分の弱さを経験しながら、結局立派な使徒たちになったわけじゃないですか。信仰というものはいろいろな感動的な経験を積みながら、少しずつ成長するものではないかと私は思います。私たちが信仰という絵を描こうとすれば、まず礎から描こうとする態度が何より必要ではないのでしょうか。屋根から描こうとする者の特徴は頭で考えることです。頭では限りがあります。信仰というものは胸、心によって可能になるのではないかと思います。

弟子たちは怖かったでしょう。このまま死んでしまうんじゃないかと思ったでしょう。信仰というものは死んでしまうんじゃないかという時はっきり表れる心です。

昨日、子供のミサで子供たちに覚えさせた言葉があります。皆様も覚えて下さい。『イエス様は必ず

私を守って下さる。』この信仰が私たちの "信仰の花" のようなものではないかと思ひます。命が危ない位自分の全ての存在が揺れてしまう位の危険にぶつかることがあると思ひます。その位怖い時があると思ひます。その時この言葉を思い出して下さい。『イエス様は必ず私を守って下さる。』この言葉を信じていれば死ぬときまで希望的に生きることができると思ひます。

ありがとうございました。